

# 少年事件における加害者家族について

門田あみ

1. はじめに
2. 少年事件における加害者家族の現状
3. 原因について
4. 親の責任とは
5. 加害者家族に対する支援について
6. これからすべき支援について
7. まとめ

## 1. はじめに

成人と比べて、少年事件においては、親のしつけや家庭環境を追求され、親が誹謗中傷によって追い詰められてしまうケースが存在する。被害者だけでなく、加害者家族も、周りからの誹謗中傷などで苦しんでいる被害者なのである。しかし、日本では、犯罪の被害者やその家族に対する支援活動は行われているにも関わらず、加害者家族に対する支援はほとんど行われていない。子供のしつけや教育には、家族、特に親が大きく関係しているため、子供の犯行を止められなかった家族にまったく責任がないわけではない。しかし、そうではないケースも存在する中で、加害者家族を責め立て、支援の手を差し伸べようとしめない日本の現状に、私は以前から疑問を抱いていた。そして、その疑問を解決するために、去年のゼミでこのことについて調べた結果、加害者家族が抱える問題の深刻さに、これはもう少し調べべき社会問題だと感じたため、取り上げることにする。

## 2. 少年事件における加害者家族の現状

まず、少年事件における加害者家族の現状について述べていくこととする。少年事件の加害者家族からの相談の主訴をまとめたデータをもとに、World Open Heart で理事長を務めている阿部恭子さんは、相談者の 90% は母・父であり、「子どもとどう向き合えばいいのか」という罪を犯した少年との関係に悩む親からの相談が 90% を超えている<sup>1</sup>。と述べている。しかし、加害者家族が悩んでいるのは、子どもとの接し方だけではない。加害者家族が置かれている現状は、かなり厳しいものである。

主な内容として、誹謗中傷、婚約が破談になった、親族付き合いが途絶えた、進学や就職

---

<sup>1</sup> 阿部恭子『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』（現代人文社、2020 年）14 頁

をあきらめた、転居を余儀なくされた、などがある。<sup>2</sup>まず、誹謗中傷には SNS を使ったものや、家の壁や玄関に落書きをされるもの、報道陣が押しかけてくるメディアスクラムなど様々なものがある。特に SNS が普及している現代では SNS による誹謗中傷が最も多いのではないかと考えられる。親戚付き合いが途絶えた、というのは、親族が近くに住んでいる場合に起こり得ることで、親族にも事件の影響が及んだ結果、縁を切られる場合<sup>3</sup>と、巻き込まれるのを嫌がって距離をとられてしまう場合などがある。転居を余儀なくされた、というのは、少年事件の特徴である少年自身が住んでいる地域や学校で事件を起こす<sup>4</sup>、というのが関係しており、有名な事件だと佐世保小 6 女児同級生殺害事件や光市母子殺害事件などがそれに該当する。被害者が同じ地域や近い場所に住んでいることから、被害者に対して申し訳なく思って転居する場合や、近隣住民からの誹謗中傷に耐えきれずに転居するケースなど様々である。

### 3. 原因について

前章において、加害者家族の現状を述べたが、この章では、その原因について述べていくこととする。主な原因は、少年法 61 条により少年が守られていることで、少年自身を攻撃することができないためである。このゼミでも取り上げられているように、少年事件において実名報道がされないことに不満を抱いている人は少なくない。そういった人々の中には、少年が責任をとれないなら家族が責任をとるべきだ、と考える人もいるのである。実際に、ハフポストという団体が家族の一員が他人に危害を加えた場合、加害者家族の責任についてどう思いますか、というアンケートを取った結果、884 件中、責任がある、と答えたのが 328 件、責任がない、と答えたのが 556 件となった。884 件中 328 件を多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれだが、約 37% は親にも責任があると感じているのは事実である。そして、責任はある、と答えた理由については、加害者の家族の一員だから、連帯責任がある、加害者が未成年の場合には、親に監督責任があると思うから、などがある。これは連帯責任という日本の特徴ともいえる風潮が影響している。日本では、個人と家族を一体化して捉える傾向にあり、事件を起こした少年の年齢が低ければ低いほどこの傾向は強く働くの

---

<sup>2</sup> PRESIDENT Online <<https://president.jp/articles/-/52646>> (2023 年 1 月 14 日) 参照

<sup>3</sup> 阿部恭子『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』(現代人文社、2020 年) 15 頁参照

<sup>4</sup> 阿部恭子『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』(現代人文社、2020 年) 15 頁参照

である。<sup>5</sup>

#### 4. 親の責任とは

では、親に求められている責任とは何なのか、それは道義的責任である。もちろん少年事件においては、少年の代わりに親が損害賠償責任を負う場合もあるが、社会から求められているのは道義的責任であると感じている親は多い。阿部恭子さんは、加害者家族は、曖昧な存在である「世間」からの終わりの見えない制裁に怯え悩まされている。支援者は、当該事件の加害者家族が背負いうる責任について、誰に対していつまでにどのような責任を負うのか、事件の進捗状況を見ながら明確にしていく必要がある<sup>6</sup>。と述べており、このことから、加害者家族は、一種の罪の意識に近いものを背負い続けていることが分かる。しかし、それは一生背負い続けることが出来るものではなく、限界がきてしまった結果、自殺を図ったりする人もいる。

#### 5. 加害者家族に対する支援について

このように悩んでいる親や家族を支援している団体に、World Open Heart という特定非営利活動法人がある。この団体は、上記で既に述べた阿部恭子さんという方が2008年に加害者家族支援を目的として設立した団体である。この団体の主な活動内容は、転居や住宅の処分に関する相談や、弁護士に関する相談、加害者との関係に関する悩み、といった様々な無料相談、会員限定ではあるが、警察署や刑事施設、裁判所などへの同行や代理傍聴といった同行支援、加害者の更生を支援する更生支援、そして同じ立場で悩んでいる人同士が交流できる、加害者家族の会となっている。<sup>7</sup>今後の被害者との接し方や、裁判になった場合どのようにすればよいのか、などと加害者家族は日々悩んでいる。World Open Heart は、そういった悩みを相談できるだけでなく、同じ悩みを持つ人同士で悩みを共有したり交流できたりする団体なのである。

---

<sup>5</sup>HUFFPOST <[加害者家族バッシング、なぜ起きる。880 の回答が示す『日本特有の“個人”の捉え方』【アンケート調査】 | ハフポスト NEWS \(huffingtonpost.jp\)](#)> (2023年1月14日) 参照

<sup>6</sup> 阿部恭子『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』（現代人文社、2020年）16頁

<sup>7</sup> 特定非営利活動法人 World Open Heart ホームページ参照

## 6. これからすべき支援について

今の日本には、私が調べた限り、加害者家族を支援する大きな団体はこの一つしかない。そこで、私はこれからすべき支援として、加害者家族同士が悩みを共有できるコミュニティを SNS 上に作ることを提案する。加害者家族は、上記で述べた通り、親族などから縁を切られてしまう場合があり、孤立して追い詰められてしまうケースが多い。そうならないようにするために、SNS 上で同じ悩みを抱えている人同士が交流したり、悩みを相談し合えるトークルームのようなものを作る。これは、World Open Heart の加害者家族の会と同じように見えるが、あれは会員限定であるのに対して、このトークルームは誰でも自由に参加できるものである。しかし、悪用目的で使用する人や誹謗中傷を行う人を防ぐために、名前を匿名にしたり、詳細な情報は話し過ぎない、誰かの意見に否定的なことをつぶやいたりしたら強制的に退出させる、などの条件をつけることで、悪用や情報漏えいがないようにする。最も良いのは、支援団体を作ることだが、加害者側を擁護することに対して否定的な意見や感情を持つ傾向のある日本で支援団体を作るのには、かなり時間を要すると考えられる。そのため、その足掛かりとなる、誰でも気軽に参加できるトークルームを作ることが、これからすべき支援なのではないかと考える。

## 7. まとめ

私が加害者家族について調べて感じたのは、これは重大な社会問題であるということだ。何も罪を犯していない人が、自分の子供や家族が罪を犯したから、という理由で責められ追い詰められる。そして最悪の場合には、追い詰められた家族が自殺したり、罪を犯した子供と一緒に死のうとして無理心中を図った例もあるという。阿部恭子さんも、「子どもを殺して私も死ぬ……」。事件を繰り返す少年の親からこの言葉を聞いたのは一度や二度ではない。<sup>8</sup>と述べている。少年事件の場合、親や家庭環境にも問題がある場合もあるが、だからといって、加害者家族を責めたり加害者家族の存在を蔑ろにしてはならない。

この問題を解決するために、まずは私たち一人一人がもっと加害者家族の現状を知り、目を向けることが重要であると考えます。

---

<sup>8</sup> 阿部恭子『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』（現代人文社、2020年）17頁